

傾向と対策 2026

[入試科目別傾向と対策]

〔一般入試A〕

■英語	20
■世界史	22
■日本史	24
■数学	26
■化学基礎	28
■生物基礎	30
■国語	32

※傾向と対策作成：河合塾グループ 株式会社 KEI アドバンス

英 語

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

出題傾向

入試日程	大問	出題分野・テーマ	難易度
2 / 3 2 / 4 2 / 5 3日間共通	第1問	空所補充問題 (文法・語法、熟語)	やや易
	第2問	整序英作文問題 (文法・語法、熟語)	標準
	第3問	会話文完成問題	標準
	第4問	会話文および広告読解問題	標準
	第5問	長文読解問題	標準
	第6問	長文読解問題	標準

●出題形式

相山女学園大学の一般入試Aは、日程から試験日を選ぶことができるうえ、最大3日程すべて受験可能で、解答形式はすべてマークシート方式である。教科型入試の場合、出願する学科によっては必須の科目もあるが、概ね任意の科目を選択して受験する形式をとり、受験教科は出願時に事前申請する必要がある。試験当日には、教科別に設定されている試験時間割に従って受験する。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

英語コミュニケーションⅠ、英語コミュニケーションⅡ (リスニングを課さない)

b. 出題内容 (大問構成)

文法・語法の空所補充問題1題、整序英作文問題1題、短めの会話文完成問題1題、長めの会話文読解問題と広告読解問題によって構成された大問が1題、長文読解問題2題の計6題 (小問数は3日程とも40問)

●問題の傾向

第1問は、単文中の空所に適切な語句を補充する形式であり、語彙・語法・文法の基本事項が幅広く問われている。高校での標準的な学習内容を土台とした出題であり、品詞、時制、関係詞、前置詞、語法などを正確に理解していれば対応可能であるものの、曖昧な知識ではなく、根拠に基づいて判断する力が求められる。第2問は整序英作文問題で、与えられた語句を並べ替えて自然な英文を完成させる形式である。熟語や構文の定着度が問われるだけでなく、文全体の構造をとらえる力が必要となる。特に、主語・動詞の対応や修飾関係を意識して組み立てることが重要であり、部分的な知識だけでなく文全体を見通す力が求められる。第3問は短い会話文完成問題であり、場面や話者の意図を踏まえた自然な応答を選ぶ力が求められる。口語表現や省略表現への慣れが必要であり、単なる文法知識ではなく、実際のコミュニケーションの流れを理解する力が試される。発話の前後関係や会話の目的を意識して選択することが重要である。第4問は会話文読解と広告・案内文などの実用的英文の読解で構成される。会話文では話者同士の関係や心情の変化、発言の意図を丁寧に追う必要があり、表面的な理解だけでなく文脈把握が重要となる。一方、広告や案内文では、必要な情報を素早く正確に読み取る力が求められ、設問に応じて情報を取捨選択する力が重要となる。第5問・第6問は長文読解問題であり、空所補充、語句の意味、内容一致、表題選択など多様な観点から問われる。説明文や実用文を中心に、論理の流れを丁寧に追う読解力が求められる。語彙・表現自体は標準レベルであるが、複数の文章を限られた時間内で処理する必要があるため、読解の正確さに加えて処理速度も重要となる。実際に2026年度の各日程でも、会話、広告、説明文など幅広い題材が扱われており、特定の分野に偏らず、標準レベルの英語を正確に読み取る力を測る傾向が一貫している。

●難易度

設問の難易度自体は入試標準レベルであり、基礎～標準の知識が定着していれば十分対応可能である。一方で、会話文、広告、長文2題など複数の分量のある素材を60分で処理する必要があるため、時間的余裕がない中で読解力と処理能力の双方が求められる試験である。

英 語

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

学習対策

一般入試Aでは、個々の設問の難しさよりも、標準レベルの問題を短時間で安定して解き切れるかどうか大きなポイントとなる。したがって、知識の定着だけでなく、「わかる」状態を「すぐに使える」状態にまで高める学習が重要である。

●知識を「思い出す」だけでなく、「即座に判断できる」状態まで高めよう

一般入試Aでは、第1問・第2問を中心に、文法・語法・語彙の知識がそのまま得点に結びつく。ここで時間をかけ過ぎると後半の読解にしわ寄せが来るため、基礎事項を見た瞬間に判断できるレベルまで仕上げるのが重要である。そのためには、参考書や問題集を「一通り終える」だけで満足するのではなく、同じ範囲を何度も反復し、「なぜその答えになるのか」を自分で説明できるようにしておきたい。特に、時制・助動詞・関係詞・比較・熟語・前置詞など、頻出分野は繰り返し確認し、迷いを減らしていくことが大切である。

●会話・広告・案内文は「特に重要な情報」を意識しよう

第3問・第4問では、自然な会話の流れや、広告・案内文に含まれる情報を素早く読み取る力が求められる。こうした問題では、本文を最初から最後まで丁寧に読むだけでなく、設問で何が問われているかを先に意識しながら読むことが有効である。例えば広告なら、料金・対象年齢・条件・日時・注意事項など、問われやすい箇所に注目する癖をつけておくと、短時間で正確に解答しやすくなる。また会話文では、誰が何に困っているのか、何を提案しているのか、どのような気持ちで話しているのかを押さえると、細かい語句がわからなくても流れをつかみやすい。普段から、学校教材だけでなく、大学入学共通テスト等に見られる案内文やポスター、短い会話文などにも触れて、「英文の種類ごとの読み方」を身につけておくとよい。

●長文は「読み切る力」だけでなく「時間を配分する力」も鍛えよう

一般入試Aで特に得点差がつきやすいのは、設問数の半分を占める、第5問・第6問の長文読解である。ここでは、内容そのものを理解する力に加えて、時間を意識して処理する力が必要になる。そのため、普段の演習でも「正解すること」だけを目的にするのではなく、制限時間を決めて解く練習を取り入れておきたい。最初は時間内に終わらなくても構わないが、どこで時間がかかったのかを分析し、設問先読みや段落ごとの要点整理など、自分なりの読み方を確立していくことが重要である。また、長文ではすべての単語を完璧に理解しようとし過ぎると時間を失いやすい。接続詞や指示語、段落ごとの話題の移り変わりを手がかりに、文章全体の流れをつかむ訓練を重ねることで、安定した得点につながるだろう。

●過去問演習を通して「ミスの原因」を分析し、再現性のある改善につなげよう

過去問に取り組む際は、単に正解や不正解を確認するだけで終わらせるのではなく、「なぜ間違えたのか」を具体的に分析することが重要である。例えば、語彙不足によるものなのか、文構造の理解不足なのか、設問の読み違いなのかといった原因を明確にし、それぞれに応じた対策を講じる必要がある。また、一度解いた問題を、時間を空けて解き直し、同じ誤りを繰り返していないかを確認することも有効である。特に本試験と同形式の問題では、「どのような思考過程で解くべきか」を意識しながら復習することで、得点力の再現性が高まる。英語に限らず、入試問題では「できなかった問題をできるようにすること」が最も重要である。過去問演習を単なる実力測定としてではなく、弱点を発見し修正する機会として活用することで、効率的に得点力を向上させることができる。形式が同じであることから、公募制推薦入試Ⅰ期（教科型）の問題を解くことも有効である。

世界史

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

出題傾向

入試日程	問題	出題分野・テーマ	難易度
2 / 3	問 1 ～問26	地中海世界の形成と展開に関する歴史的事象 東アジア・西アジアの交流と変容に関する歴史的事象	標準
2 / 4	問 1 ～問26	思想・宗教・制度・技術の展開とその影響に関する歴史的事象 近世以降の欧米諸国と国際秩序の変動に関する歴史的事象	標準
2 / 5	問 1 ～問26	ユーラシア大陸の諸帝国・諸王朝の統治と変遷に関する歴史的事象 20世紀の革命・脱植民地化・冷戦とその後に関する歴史的事象	標準

●出題形式

どの日程においても、リード文のない独立問題の形式で出題されている。設問数は各日程とも26問で、解答形式はすべてマークシート方式である。出題の中心は、4つの選択肢から最も適切なものを選ぶ問題であり、一部に年代整序問題も含まれている。地図・写真・グラフ・史料などの視覚資料を用いた問題は見られず、文章のみから歴史的事実を読み取り、正誤や適否を判断する力が求められる。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

3日程を通して、古代から現代まで幅広い時代が出題対象となっている。古代ギリシア・ローマ、中国王朝史、中世ヨーロッパ、イスラーム世界、近代ヨーロッパ、帝国主義、二度の世界大戦、冷戦後の世界まで扱われており、特定の時代に偏った出題ではない。

b. 出題内容

地域的には、ヨーロッパ・東アジア・西アジアからの出題が比較的多いが、これに加えて南アジア・中央アジア・東南アジア・アメリカ大陸・アフリカ大陸に関する問題も含まれている。内容面では政治史が中心であるものの、思想・宗教・学術・建築・文化に関する問題も一定数出題されている。したがって、単に王朝名や事件名を暗記しているだけでは十分でなく、各地域・各時代の歴史事項を文脈の中で理解しているかが問われる構成といえる。

●問題の傾向

設問の多くは、各選択肢に一定の長さの説明文が置かれ、その内容の正誤や適否を判断させる形式である。そのため、歴史用語の知識だけでなく、人物・国家・制度・事件について、時代や地域の整合性を確認しながら判断する力が必要となる。また、年代整序問題も見られるため、個別知識の暗記だけでなく、歴史の流れを時系列で把握しているかどうか問われている。一見すると平易な問題でも、正確な知識の定着度によって得点差が生じやすい。

●難易度

正誤判定問題が多いが、難易度は全体として標準的であり、概ね教科書レベルの基本事項を正確に理解しているかどうかを確認する出題である。

世界史

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

学習対策

●全時代・全地域を見渡した学習を進めよう

椋山女学園大学の世界史では、古代から現代まで、またヨーロッパ・アジア・アメリカ・アフリカを含む広い地域から出題されている。したがって、特定の時代や地域だけに学習を偏らせると得点が安定しにくい。まずは通史を最後まで一通り学習し、そのうえで苦手な時代や地域を重点的に復習する形で、全体を見渡した学習を進めたい。受験生が後回しにしがちな現代史や日本の周辺地域の情勢も含めて、教科書の最後まで手を抜かずに学習することが重要である。

●教科書を精読し、歴史事項を説明できるレベルまで理解しよう

椋山女学園大学の世界史では、選択肢中に知っている語句が並んでいても、説明全体としては誤っているという形の設問が多く見られる。したがって、用語の意味を暗記するだけでは不十分であり、教科書を読みながら「いつ、どこで、誰が、なぜ、何を行い、その結果どうなったか」を整理して学ぶ必要がある。人物と事件、国家と制度、宗教と文化などを関連づけて理解し、歴史事項を自分の言葉で説明できるレベルまで知識を深めておきたい。

●文章選択問題と年代整序問題の演習を重ねよう

設問の中心は、4つの文章から最も適切なものを選ぶ問題である。したがって、過去問や標準的な問題集を用いて、文章を丁寧に読み比べながら正誤を判断する練習を積むことが重要である。誤文を見つけたときは、どの語句やどの部分が誤りなのかを明確にし、正しい内容に直して確認する学習が効果的である。また、年代整序問題も出題されているため、重要事項を個別に覚えるだけでなく、歴史上の大きな転換点となった出来事の年代の暗記に加え、出来事同士の前後関係や因果関係なども意識して整理しておきたい。

●テーマごとの横断的整理を意識しよう

1つの時代や1つの地域だけの知識で完結するのではなく、同じ地域やテーマに関する複数時代の知識を関連づけて考えさせる設問が目立っている。例えば、中国史やヨーロッパ史では、王朝交替・制度変化・対外関係を長い時間軸で理解していることが求められる。したがって、学習の際には通史に加えて「中国の統治制度」「ヨーロッパの国家形成」「イスラーム世界の展開」といったテーマごとに整理し、異なる時代をつなげて理解することを意識したい。時代別や地域別の暗記に加えて、テーマ別に知識を引き出せるようにしておこう。

日本史

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

出題傾向

入試日程	大問	出題分野・テーマ	難易度
2 / 3	第1問	明治時代の日本	標準～難
	第2問	原始～中世の日本	
	第3問	近現代の日本	
	第4問	江戸時代の日本	
	第5問	近現代の日本	
2 / 4	第1問	近現代の日本	標準～難
	第2問	原始～中世の日本	
	第3問	近世～現代の日本	
	第4問	江戸時代の日本	
	第5問	近現代の日本	
2 / 5	第1問	近現代の日本	標準～難
	第2問	原始～中世の日本	
	第3問	近世～現代の日本	
	第4問	江戸時代の日本	
	第5問	近現代の日本	

●出題形式

どの日程においても、解答形式はすべてマークシート方式である。出題の中心は、4つの選択肢から最も適切なものを選ぶ問題であり、一部に6つの選択肢の問題も含まれている。問題形式は単語を選ぶ問題と正誤問題のみで、時期整序問題や論述問題などは見られない。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

3日程を通して、古代から現代まで幅広い時代が出題対象となっている。ただし、旧石器時代・縄文時代・弥生時代などの原始に関する問題は見られなかった。また、3日程を通して、「大河ドラマ」に関する会話文をテーマとして、江戸時代の範囲に偏った問題が出題された。

b. 出題内容

政治史・外交史・経済史・社会史・文化史のすべての分野が出題されるが、出題は政治史にやや偏りが見られる。正誤問題では、単語や時期の誤りだけでなく、「増加・減少」「高騰・下落」などの誤りを指摘して解答する問題も出題されており、単なる重要用語・重要時期の「暗記」に留まらず、内容・方法・背景・理由・結果・影響などの「理解」を重視した学習を問う出題といえる。

●問題の傾向

リード文としての会話文や史料、絵画などを用いた出題と択一式の問題がバランスよく出題される傾向は、3日程とも共通である。着目すべきは正誤問題の文章の長さである。ほとんどの出題において1つの選択肢の文の長さが2行あるいは3行にわたっており、選択肢の読解だけでもかなりの時間を要する。知識としては教科書本文レベルのものであるが、選択肢の文が長い分、難しく感じる受験生は多いと思われる。

●難易度

全日程、標準～難といえる。単語を選ぶ択一式の問題は易しいが、正誤問題は多くの受験生が苦戦すると考えられる。正誤判定の該当箇所が、知識としては教科書本文レベルでも、選択肢の文の長さや、単語の「暗記」ではなく「理解」を問う形式であるため難度があがっている。

日本史

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

学習対策

●教科書をベースにオーソドックスな学習を心掛けよう

相山女学園大学の日本史では、基本的に全時代・全分野が出題される。戦後史からの出題も見られるので、まずは教科書を全時代網羅的に学習することが合格への第一歩だといえる。分野に関しても出題は政治史が多いが、社会史や文化史からも出題されるので、政治史を中心として分野に偏りを作らない学習を心掛けてほしい。また、写真や史料を用いた出題も見られるので、学習を進める中で教科書に掲載されている写真・グラフ・表・史料などにもしっかりと触れておきたい。

●教科書を読み込む中で、歴史を「理解」しよう

相山女学園大学の日本史では、正誤問題の選択肢が、教科書本文の内容を意識して作られているといえる。まずは教科書を一巡するに留まらず、何度も読み込んでほしい。また、読み込みを進める中で、歴史的事象の内容・方法・背景・理由・結果・影響などの「理解」を高めたい。「なぜ?」「どのような?」「どのように?」「結果は?」「影響は?」といった疑問を学習する歴史的事象に自ら問いかけ、答えられなかったものは用語集などで調べる学習を進めていけば、必ず「理解」は深まっていくので、挑戦してほしい。

●一問一答形式の問題集で、単語レベルの定着を図ろう

相山女学園大学の日本史では、択一式の問題も多く出題される。単語を選ぶ問題は比較的易しいものが多く、逆にいえば、本番はここでの失点は避けたい。網羅的な教科書ベースの学習で各時代の1分野が終了したら、すぐに次の分野の学習にいくのではなく、ぜひ「一問一答形式の問題集」に取り組んでほしい。もちろん、分野ではなく時代ごとにこの学習を取り入れても構わないが、最初のうちはできるだけ細かく、小さい分野ごとに取り入れてほしい。この学習を、何周も繰り返し行う教科書の読み込み学習と並行して実施することで、確実に合格に近づいていくはずである。

●過去問を解き、正誤問題の選択肢を研究しよう

相山女学園大学の合格の鍵となるのは、間違いなく正誤問題の正答率である。正誤問題の正答率を高めずして相山女学園大学の合格はない。それは過去問を見れば明らかである。全範囲の網羅的な学習を終えたら、まずは問題集よりも過去問に取り組むべきである。過去問を解き終わったら、その復習の中で、教科書本文と正誤問題の選択肢を照らしあわせる学習が効果的である。相山女学園大学の入試問題の正誤問題においては、どのような部分が正誤判定の該当箇所となるのかを研究してほしい。過去問を解き終え、研究が終わったあとに、市販の正誤問題集などに取り組むと一層盤石な対策となるだろう。

数 学

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

出題傾向

※第3問・第4問は【数学Ⅰ・数学A】または【数学Ⅱ・数学B・数学C】のどちらかを選択

入試日程	大問	出題分野・テーマ	難易度
2/3	第1問	数学Ⅰ 数と式／データの分析	やや易
	第2問	数学Ⅰ 2次関数	やや易
	第3問 (選択)	数学Ⅰ・A 図形と計量／図形の性質	標準
		数学Ⅱ 三角関数	標準
	第4問 (選択)	数学A 場合の数と確率	やや難
		数学B 数列	標準
2/4	第1問	数学Ⅰ 数と式／データの分析	標準
	第2問	数学Ⅰ 図形と計量	標準
	第3問 (選択)	数学A 場合の数と確率	標準
		数学Ⅱ 微分法と積分法	標準
	第4問 (選択)	数学A 図形の性質	やや難
		数学C 空間のベクトル	やや難
2/5	第1問	数学Ⅰ 数と式／データの分析	標準
	第2問	数学Ⅰ 2次関数	標準
	第3問 (選択)	数学A 場合の数と確率	標準
		数学Ⅱ 微分法と積分法	標準
	第4問 (選択)	数学A 図形の性質	やや難
		数学B・C 数列／ベクトル	やや難

●出題形式

数学は、試験時間60分で大問を4題解答する形式である。第1問・第2問は必答問題、第3問・第4問は【数学Ⅰ・数学A】または【数学Ⅱ・数学B・数学C】のどちらか一方を試験会場で選択して解答する。

解答形式は、当てはまる数値または適切な選択肢の番号をマークするマークシート方式である。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

数学Ⅰ・数学A (図形の性質・場合の数と確率)、数学Ⅱ・数学B (数列)、数学C (ベクトル)

b. 出題内容

第1問・第2問は必答問題で数学Ⅰから出題されている。第3問・第4問は【数学Ⅰ・数学A】と【数学Ⅱ・数学B・数学C】の選択問題で、【数学Ⅰ・数学A】は「図形と計量 (数学Ⅰ)」「場合の数と確率 (数学A)」「図形の性質 (数学A)」から、【数学Ⅱ・数学B・数学C】は「三角関数 (数学Ⅱ)」「微分法と積分法 (数学Ⅱ)」「数列 (数学B)」「空間のベクトル (数学C)」から出題されている。

●問題の傾向

必答の第1問には全日程で数と式とデータの分析が組み込まれており、平均・分散・標準偏差・相関係数といった統計量の処理が繰り返し問われる点が際立つ。第2問は2次関数、図形と計量が試験日ごとに入れ替わる。

選択問題の【数学Ⅰ・数学A】は、場合の数と確率が全日程で出題され、もう1題は平面図形を題材にした問題である。図形の問題は年度によって色合いが異なり、教科書レベルの定理を積み重ねる年度もあれば、計算量や発想の踏み込みが必要になる年度もある。【数学Ⅱ・数学B・数学C】では、三角関数、微分法と積分法、数列、空間のベクトルの中から2つ程度が組みあわされる構成で、典型的な誘導を追っていけば最後まで解き切れる設問が多い。

どの大問も空欄穴埋め式の誘導が細かく張り巡らされており、前の小問の答えが次の小問の入り口になる作りである。完答型の記述力よりも、設問の流れを素早く読み取って計算をしていく処理能力が問われている。

●難易度

必答の第1問・第2問は、全日程を通して「やや易～標準」に収まっており、教科書準拠の演習をきちんと積んでいれば得点源にできる。選択問題は日程間の差がやや大きく、標準的な誘導で完結する日程もあれば、後半の小問で場合分けが細くなる設問や図形の最適化を扱う設問のように、計算量が多い日程もある。選択をどちらにするかで、当日の労力が目に見えて変わることがあるのも、相山女学園大学の数学の特徴である。

数 学

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

学習対策

●選択科目のルートを先に決めておく

梶山女学園大学の数学で最初に考えるべきは、第3問・第4問で【数学Ⅰ・数学A】と【数学Ⅱ・数学B・数学C】のどちらを本命に据えるかである。数学Ⅰ・数学Aだけで受験することもできるが、数学Ⅱ以降まで一通り学習していれば、試験会場でそのときの設問を見比べて有利な側を選ぶ余地が生まれる。反対に、数学Ⅰ・Aに絞ると決めたのなら、その範囲を隅々まで仕上げる覚悟が必要になる。

どちらを選ぶにせよ、秋までには判断しておきたい。年内のうちに過去問を数年分あたり、自分にとって解きやすい側がどちらかを実感として掴んでおくといよい。迷ったまま本番を迎えると、試験開始直後の選択の場面で時間を失い、そのまま立て直せないことが多い。

●データの分析を確実な得点源にする

必答の第1問には、平均・分散・標準偏差・相関係数を使う場面が毎年のように登場する。ここは梶山女学園大学の数学で最も安定して出題される部分で、得点源に変えられるかどうか合否をわける。定義式を覚えるだけでは不十分で、度数分布から平均や分散を逆算する、与えられた近似値を使って相関係数を計算する、といった「少し捻った使い方」までこなせる状態にしておきたい。

マークシート方式である以上、記入するのは最終の数値だけである。導出の過程が合っている、途中の符号や約分を1つ落とせばそのまま失点になる。演習の段階から、答えを書き切った後に数値を検算する工程まで含めて一連の作業として扱うといよい。

●誘導の読み取りを反復で鍛える

選択問題を中心に、梶山女学園大学の数学は一貫してつながりを意識した構成である。前の小問で求めた式や値を次の小問でそのまま使う設計になっているため、「どの値を引き継ぐのか」「この結果を次でどう組み替えるのか」を意識しながら解き進める姿勢が欠かせない。誘導の意図を読み違えると、直後の小問が丸ごと解けなくなってしまう。

そこで、マークシート方式の総合問題を素材にして練習を重ねたい。答えあわせでは、正解した問題についても設問同士のつながりを一度言葉で整理しておく、未知の題材に出会ったときに道筋を立てやすくなる。初見の問題を前にしても、その問題の目的が読めれば、大半の問題は最後まで辿り着ける。

●時間配分と見切りの判断

大問4題を60分で処理する梶山女学園大学の数学では、どこで粘ってどこで手を引くかの判断が得点差に直結する。選択問題の中には、計算量が多く、1つの小問で5分以上時間がかかる設問も紛れている。そこに深入りした結果、点を取りやすいほかの問題に取りかかれないという失敗が起こりがちである。

対策としては、過去問演習の段階から大問ごとの目標所要時間を書き留めておくといよい。目標タイムを越えた時点で一度手を止め、この先を粘るか、いったん飛ばしてあとで戻って解くかを自分の中で決める癖をつけておく。マークシート方式なら部分点の心配はなく、解ける問題から拾っていく方が得点は伸びやすい。本番で焦らず取捨選択できるかどうかは、ほとんど直前期の演習の積み重ねで決まる。落ち着いて実力を出し切れる状態で当日を迎えてほしい。

化学基礎

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

出題傾向

入試日程	大問	出題分野・テーマ	難易度
2/3	第1問	物質の構成と化学結合 (物質の構成、物質の構成粒子、粒子の結合)	やや易
	第2問	物質の変化 (濃度、化学反応式と物質質量)	標準
	第3問	物質の変化 (酸と塩基)	標準
	第4問	物質の変化 (酸化還元反応)	やや難
2/4	第1問	物質の構成と化学結合 (物質の構成、物質の構成粒子)	やや易
	第2問	物質の変化 (原子量・分子量・式量、化学反応式と物質質量)	標準
	第3問	物質の変化 (酸と塩基)	やや難
	第4問	物質の変化 (酸化還元反応)	やや難
2/5	第1問	物質の構成と化学結合 (物質の構成、物質の構成粒子)	やや易
	第2問	物質の変化 (物質質量、濃度、化学変化の量的関係)	やや難
	第3問	物質の変化 (酸と塩基)	やや難
	第4問	物質の変化 (酸化還元反応)	標準

●出題形式

いずれの日程も大問数は4題、解答数は40で、解答群の中から正答を選ぶマークシート方式である。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

いずれの日程も、ほとんどが「化学基礎」の全範囲からの出題で、偏りはない。

b. 出題内容

「化学基礎」のすべての内容から出題されている。具体的には、次のようなものがあげられる。

混合物の分離、原子の電子配置、配位結合と錯イオン、溶液の濃度、硝酸の工業的製法、酸と塩基の定義、中和滴定と実験器具、水溶液の液性、滴定指示薬、酸化還元反応と酸化数、電池、水溶液の調製、物理変化、原子核と放射性同位体、周期表、酸・塩基、水溶液中のイオン濃度、中和反応と塩、金属イオンの特定、酸化還元滴定、炎色反応、イオン化エネルギー、水溶液のpH、酸化剤還元剤、金属のイオン化傾向など。

なお、「化学基礎」の教科書で「発展」や「参考」として扱われている内容からの出題もある。

●問題の傾向

「正しいものの組みあわせを問う問題」「○○であるものに該当する個数を問う問題」「順に並べる問題」という形式の出題があり、与えられている記述すべての正誤が判断できないと正答できない。また、計算問題では、前問が正答できてはじめて正答に辿り着くことができる問題もある。さらに、中和滴定や酸化還元滴定などの実験問題では、実験器具の使い方や終点の判断の方法など実験操作に関する内容はもちろん、実験結果をきちんと考察できないと正答できない問題も出題される。

●難易度

いずれの日程も難易度に大きな差はない。出題されている問題の多くは教科書に記載の内容やテーマであり、全体としての難易度は標準だが正答しにくい問題もある。計算問題は、化学反応式の係数をつけ間違えると正答を導き出せないものもあるため、注意が必要である。

2026年度では、2月3日の第2問の間2(a)で硝酸の工業的製法に関する計算問題が出されており、「化学基礎」では取り扱わない内容なので解きにくいと感じた人もいると思うが、反応式すべてが記されているので、普段から問題をよく読んで解く習慣があればそれほど苦労することなく解答することができる。第4問の間2(b)でも教科書では単に酸化防止剤としか書かれていないアスコルビン酸の半反応式を与えての計算などが出されたが、見慣れない式でも考え方は変わらないので落ち着いて取り組みたい。

2月4日の第2問の間2(b)のエタノールの燃焼反応後の容器内の気体の物質質量は、反応にばかり注目すると反応に関わらなかった窒素の物質質量を忘れがちなので注意が必要。第3問の間2(b)の計算問題では、何がどう変化するかきちんと考え、与えられた数値をうまく使いこなせないと正答しにくい。

2月5日の第2問の間3は「化学」の無機化学で学習する計算問題で、「化学」を学習していなくても解ける問題ではあるものの、初見では正答しにくい。第3問の間2(c)は中和滴定の実験問題で、よく問われる内容と違っているのが戸惑うかもしれないが、水溶液の体積に気を配りながら式を立てれば難しくはない。

化学基礎

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

学習対策**●教科書の内容のすべてを理解し、覚えなければならないことはきっちり暗記すること**

梶山女学園大学の入試は、「化学基礎」の教科書に記載されている内容から幅広く出題されているが、一部に「発展」や「参考」として扱われている内容も含まれている。2026年度では、沈殿滴定などがそれにあたる。そのほか、「化学」で学習する質量モル濃度、無機化学の硝酸の工業的製法をもとにした問題なども出題されている。

これらの問題は「化学基礎」の知識と理解力があればほとんど正答できるが、初見では戸惑う受験生も多いだろう。また、酸化数のルール、すなわち「共有結合している原子の酸化数は、共有電子対の電子が電気陰性度の大きな原子へ完全に移動したと仮定して考える」という考え方を理解していなければ正答できない設問も見られた。こうした設問に対応するには、教科書の例題や練習問題を解くだけでなく、本文を丁寧に読み込んで定義を確実に理解しておく必要がある。計算問題についても、典型的な解法を単に暗記するのではなく、なぜその解法をとるのかを意識しながら取り組むことが重要である。あまり見かけない実験操作が出題される可能性もあるため、図表や図説などで実験操作を丁寧に確認しておくとういだろう。

●教科書傍用問題集を活用すること

酸と塩基、酸化還元分野では実験をもとにした計算問題や考察問題が頻出であるため、この範囲は特に重点的に仕上げておきたい。また、実験をもとにした計算問題では濃度が関わってくるが、水和水を持つ物質を扱った濃度の計算問題も頻出なので、ミスなく取り扱えるようにしておきたい。

これらの計算問題や考察問題の対策として、教科書の例題や問題だけでは演習量が足りないため、教科書傍用問題集を併用した学習をおすすめする。その際、問題を解いて終わりにするのではなく、解き終えた後に教科書の該当範囲を読み返す習慣をつけたい。そうすることで理解が深まり、新たな気づきも得られるはずである。

●過去問の対策を十分に行うこと

梶山女学園大学の入試では、「化学基礎」であまり見慣れない問題やテーマが出題されることがある。教科書と教科書傍用問題集を用いて学習したら、過去問にチャレンジしてみよう。過去問を解いた際に見慣れない問題が出題されていたら、図表や図説でその内容を確認しておこう。十分学習しているのに見慣れない問題が出てきたとしても、丁寧に学習を積み重ねてきた自分を信じてほしい。大切なのは完答を目指すことではなく、知っている知識を確実に活かし、問題文をしっかりと読んで冷静に考えることだ。その姿勢さえ持ち続けられれば、結果は必ずついてくる。

生物基礎

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

出題傾向

入試日程	大問	出題分野・出題テーマ	難易度
2/3	第1問	生物の特徴・共通性と多様性・エネルギーと代謝	標準
	第2問	遺伝子とそのはたらき	標準
	第3問	体内での情報伝達と調節・免疫のはたらき	標準
	第4問	植生の遷移とバイオーム	標準
	第5問	生態系とその保全	標準
2/4	第1問	生物の特徴・顕微鏡の使い方	標準
	第2問	遺伝情報の複製と分配	標準
	第3問	体内環境の維持のしくみ	標準
	第4問	植生の遷移	標準
	第5問	生態系と生物の多様性	標準
2/5	第1問	エネルギーと代謝	標準
	第2問	遺伝情報とDNA・遺伝情報の発現	標準
	第3問	体内での情報伝達と調節	標準
	第4問	植生の分布とバイオーム	標準
	第5問	生態系のバランスと保全	標準

●出題形式

大問の数は、2026年度は全日程(2月3日～5日)で5題であった。また、各日程とも総マーク数が45個であった。解答方式はすべてマークシート方式であった。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

生物基礎の全範囲である。

b. 出題内容

生物基礎の大きな4分野、「生物の特徴」「遺伝子とそのはたらき」「ヒトの体内環境の維持」「生態系と生物の多様性」から1～2題ずつが各日程で出題されており、教科書の全範囲からバランスよく出題されている。実際の生物の写真を用いた問題は2024年度～2026年度の3年連続で出題されている。生物基礎の教科書の「参考」にしか記載のない内容が一部の設問に見られる。心臓の構造とはたらきのように一部の教科書では詳細に記載されていない知識も出題されている。

●問題の傾向

空所補充・文章正誤・計算・考察など多様な形式の問題がバランスよく配置されており、幅広い力が試される試験である。試験時間に対する問題量は標準的だが、マーク数はやや多めとなっている。計算問題やデータ読み取りを伴う考察問題は各日程で出題されるため、これらに時間をかけ過ぎないよう意識することが重要となる。

●難易度

標準的な難易度の問題がほとんどを占めるので、解ける問題からしっかりと解答できれば合格点に達すると思われる。2月3日の第2問の間2(2)の「最も多く指定されて翻訳に使用されたアミノ酸」を求める問題は題意が取りにくく受験生は難しく感じたと思われる。また、2月3日の第4問の間2(1)の地図からバイオームを解答する問題では、世界地図とバイオームの分布は各社教科書には記載されているものの、暗記が難しい内容が問われた。2月4日の第5問の間2(2)は教科書ではしばしば記載されているテーマではあるものの判断に迷った受験生も多かったと思われる。2月5日の第2問の間4(1)では、大腸菌とT2ファージの実験の攪拌と遠心の意味というしっかりと学習しないと対応できない内容が問われた。これら以外にも実験考察問題や計算問題の中に難しさを感じた受験生がいたと思われる。問題数が多いうえに各小問の配点は低いから、実際の入試では難しい問題は後回しにする判断ができないと時間的に苦しく感じただろう。

生物基礎

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

学習対策**●教科書レベルの知識が重要**

「生物基礎」の教科書に載っている知識を確実に身につけてから試験に臨むことで、瞬時に必要な知識を引き出せるようになる。また、過去の入試では「参考」欄からの出題も見られる。本文にとどまらず、「参考」や「発展」、脚注といったコラム的な箇所にも目を通しておくことが望ましい。分野に関しては、全分野からバランスよく出題されているため、苦手分野もしっかりと学習しておきたい。「生物基礎」では、教科書と授業ノートを基本に学習を進めればよいが、自分の授業ノートに自信を持ってない受験生は市販の書き込み式ノートを利用するのもよいだろう。

教科書の学習において、太字の語句を機械的に暗記するだけでは不十分である。語句そのものを答える問題だけでなく、その定義や語句間の関係性の理解を問う問題も多く出題される。教科書は、生命現象の流れをしっかりと把握できるまで丁寧に読み込んでおくことが必要である。また、教科書に記載されている各図からの出題もある。図や表やグラフは重要であるから教科書に記載されているのであり、言葉での説明よりも難しく感じるかもしれないが、自分で何度も図等を描いて整理するなど理解が必須である。

●計算問題は典型問題から学習しよう

2026年度に出題された「細胞周期の時間の計算」「ミクロメーターの計算」「光学顕微鏡の操作に関する計算」などは、学校の定期テストでもよく出題される典型的な計算問題なので、しっかりと練習しておきたい。これに対して、「ゲノムの複製にかかる時間の計算」「ATPの再合成回数の計算」「DNAの長さの計算」「ゲノム中の遺伝子の割合の計算」など、より発展レベルの計算問題の出題もある。

まずは典型問題の計算問題を確実に解答できるようにしておきたい。教科書や教科書傍用問題集などで演習を繰り返すことによって、できるだけ多くの典型問題の解き方を身につけておくことをおすすめする。計算問題に対する苦手意識は、演習を繰り返す中で、正しい解法を用いて算出する経験を積むことができれば、克服することができる。

これに対して、発展レベルの計算問題は、基本的な計算の組みあわせで解答するまでに何段階かの計算過程を要するのでさらに難しく感じられる。対策は典型問題の計算問題ができるようになってからでよく、このような問題の学習で時間をとられ過ぎると、試験時間が足りなくなる可能性もあるため、発展的な問題は後回しにして、まずは典型的な計算問題を解き切ることを目標としたい。

●考察問題では知識と情報整理能力が重要

考察問題も、計算問題と同様に苦手意識を持っている受験生が多い。考察問題には知識を応用して考えるものが多いが、そこに用いる知識が抜けていると考察するところまで辿り着けない。まずは教科書レベルの知識をしっかりと身につけてから、考察問題の演習に挑もう。また、考察問題では、問題文の記載を自分で整理して表を作成することも解法の重要な1つである。さらに、考察問題は時間がかかるため、知識問題や計算問題をいかに早く解いておくかが重要となってくる。

●過去問と大学入学共通テストを解いておく

過去問を解くことは、出題形式、出題内容の把握に有効である。なお、誤答や計算ミスを誘導するような問題が出される場合もあるので注意しておこう。生物基礎の範囲は広くないため、過去に出題された内容に類似した問題が繰り返し出題されることも多い。また、考察問題は大学入学共通テストの生物基礎と似た出題が多いので、考察問題が苦手な受験生は大学入学共通テストの過去問を試験対策として利用するとよい。

国語

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

出題傾向

※第二問は、現代文または古文のどちらかを選択

入試日程	大問	出典	難易度
2 / 3	第一問	貴戸理恵『「コミュ障」の社会学』	標準
	第二問 【古文】	荷田在満『国歌八論』	標準
	第二問 【現代文】	小松和彦『妖怪学新考——妖怪からみる日本人の心』	標準
2 / 4	第一問	柿本真代『児童雑誌の誕生』	標準
	第二問 【古文】	『落窪物語』	標準
	第二問 【現代文】	【資料1】文化審議会答申「敬語の指針」(二〇〇七年) 【資料2】文化庁国語課「令和二年度 国語に関する世論調査」(二〇二一年) 【資料3】金澤裕之『留学生の日本語は、未来の日本語—日本語の変化のダイナミズム』ひつじ書房(二〇〇八年) 【資料4】滝島雅子他「相手選手に点を“あげて”しまってもよいのか—二〇一九年『日本語のゆれに関する調査』から—」『放送研究と調査』(二〇一九年)	やや難
2 / 5	第一問	渡邊雅子『論理的思考とは何か』	標準
	第二問 【古文】	『平家物語』	標準
	第二問 【現代文】	佐藤学『第四次産業革命と教育の未来——ポストコロナ時代のICT教育』	標準

●出題形式

すべて長文形式の総合問題であり、基本的に五肢択一(一部の問題を除く)のマークシート方式である。第一問は解答必須問題の現代文であり、第二問は【古文】か【現代文】のどちらか一方を選択して解答する形式となっている。

●出題範囲と出題内容

a. 出題範囲

現代文は近代以降の文章、古文は近世以前の文章である。漢文は出題されていない。

b. 出題内容

【現代文】

例年と同様に、2026年度も基本的に評論文からの出題であったが、2月4日の第二問【現代文】のみ、問題文に資料(世論調査をまとめた表)が用いられた。ジャンルは、社会学、民俗学、書物史、日本語学、思考論、教育論などであり、多彩なジャンルから出題されている。総じて、主張の明確な文章が多かった。

【古文】

2025年度の出典が平安期の日記、鎌倉時代の説話であったのに対し、2026年度は歌論、平安期の物語、鎌倉期の軍記物語が出題された。

●問題の傾向

【現代文】

設問数は、第一問は10～11問（マーク数15～21）、第二問は10～12問（マーク数13～15）。設問は、漢字、語句の読み・意味、接続詞・語句（慣用句含む）・敬語・文の空所補充、脱文挿入、傍線部の内容説明または理由説明、内容一致（不一致）など、いずれも現代文入試の定番問題であった。ただし、2月4日の第二問では、資料の読み取りが出題されたため、評論文におけるものとは異なる趣旨の設問が見られた。具体的には、【資料1】の指針に示された内容と【資料2】の表を比較して適切なものを選ぶ設問が特徴的であった。

第一問の文字数は、2025年度入試では日程によっては3,000字程度のものもあったが、2026年度入試では全日程で5,000字を超えている。設問内容は漢字の書き取り・読み、語句の意味を問う問題、空所補充問題（接続詞・語句・文）、内容理解に関する問題、問題文の趣旨などである。

第二問の文字数は2月3日・5日では約6,200～6,600字程度と長い文章が出題されており、第一問と合計した現代文の文章量は、2025年度と比較すると全体的に増加している。また、2月4日の第二問は、文化審議会答申とそれに関連する表、文章、生徒同士の会話を組み合わせた新傾向型入試に対応した問題になっている。2024年度にも生徒同士の会話を提示し、出典の趣旨との整合性を判断させる問題や、複数の文章や図を用いた問題など、大学入学共通テストの新傾向型入試を意識した問題が出題されていることから、今後もこのような出題は続くと考えられるため、対策が求められる。

【古文】

設問数は、7～11問（マーク数11～18）で、原則五肢択一である。設問内容は、単語力を問う短文解釈、文法、文学史といった知識問題と、敬意の方向の判別、傍線部の解釈、内容説明など読解力を踏まえた問題である。総じて、幅広い知識と文脈を正確に読み取る力、選択肢を丁寧に吟味する姿勢を要求する問題であった。問題文の文字数は、約1,200～1,600字程度であった。

具体的な傾向は以下の通り。

- ・ 解釈の問題は、単なる傍線部の逐語訳を課す設問だけではなく、前後の文脈を加味したうえで思考し、選択肢を選ばなくてはならないものも多い。
- ・ 内容説明問題も、単に傍線部を逐語訳していれば解答が見えてくるというものではなく、傍線部を訳したうえで、前後の文脈の中でどういうことを意味しているのかを判断しなければならない。
- ・ 文法問題は、敬意の方向、品詞分解、識別に関する問題が出題され、まぎらわしい敬語動詞や助動詞・助詞の正確な知識を問う内容であった。
- ・ 2024年度は歌論の主旨や、説話の「オチ」の内容を解説する問題など、要約力と論理的思考を要する問題が特徴的であった。2026年度も2025年度と同様に基本的な全体の方針は変わらないものの、物語については、主語を正確にとらえての内容理解が求められる、遊びの少ない正当な問題であったといえる。
- ・ 例年、文学史の問題は全日程で出題されているが、2026年度は2月5日のみ出題されていない。3日・4日に出題された文学史の問題は、大学入試の平均的な難易度のものであった。

●難易度

【現代文】

2026年度入試は、全体的に標準レベルの典型的な入試の現代文であったが、現代文・古文ともに長い文章が出題されたことにより、時間配分が難しく感じられた可能性がある。また、2月4日の第二問は資料の読み取りが求められたため、このような問題の対策を行っていなかった受験生には難しく感じられた可能性がある。

【古文】

2026年度入試は、歌論・物語からの出題であり、いずれも入試の古文としては定番のものであった。標準的な難易度の設問であったが、物語は引用文前に示される概要や注を手掛かりに場面を把握して読み進める必要があるため、例えば主語を取り違えることなどで、内容がわからなくなってしまう可能性がある。

国語

(一般入試は、一般入試Aの問題のみ分析しています)

学習対策

【現代文】

●長文を読み解き、筆者の主張をとらえよう

2026年度入試では問題文の分量の増加が見られたことから、5,000字程度の評論文を読み解く練習が必須である。国語の試験時間を60分として、その時間で2大問を解く必要があるため、自分なりの時間配分を決め、1大間に費やせる時間の半分で文章を読む練習をしよう。問題集の文章を読むのもよいし、新書を5,000字程度のまとまりごとに読んでいくのもよい。その際、ただ漫然と読むのではなく、文章構成や筆者の主張をとらえることが大切である。評論文の筆者は自分の主張を伝えるために文章を書いているが、それをわかりやすく伝えるために、具体例をあげたり、自分の主張と他者の考えを対比させたり、比較したりしている。評論文を読むときには、まず冒頭部分から話題（文章のテーマ）をとらえ、筆者の考えと具体例、筆者の考えと他者の考えといった区別をしながら読み、筆者の論の展開を正確に把握するようにしよう。これらを押さえておくと、設問にも答えやすくなる。

●知識問題で確実に得点できるようにしよう

椋山女学園大学の入試では、第一問・第二問を通して漢字や語句の意味など、知識を問う設問が出題されている。特に漢字の出題は多く、同音異字の中から正しい漢字を選ぶ問題が必出である。漢字の問題集や参考書に取り組み、熟語単位で漢字を覚えたり、漢字の意味を覚えたりすることで、同音異字を区別できるようにしよう。

●マークシート方式の問題に慣れよう

選択肢の中から正しいものを選ぶ練習のために、大学入学共通テスト対策の問題集やマークシート方式の私立大学対策問題集に取り組もう。選択肢の中には、ほんの一部分だけが本文の内容と違ったり、本文からは読み取れない内容が含まれていたりする場合がある。迷ったときには常に本文に立ち戻り、本文と選択肢を照らしあわせて判断するようにすること。また、本文の分量も設問数も多めであるため、過去問に取り組んで、時間配分の練習をしておくとうよい。マークシートにマークするときには解答番号を確認することも習慣づけておこう。

●社会問題に関心を向け、新書の読書を

椋山女学園大学の2026年度入試では、社会学系の評論文が多く出題された。普段からニュースなどで目にする社会問題に関心を向けたり、積極的に新書を読んだりしてみよう。出題される評論文のテーマについて少しでも知識があると、問題文を読むときのハードルも下がるはずだ。

●新傾向型問題への対策を

2025年度より大学入学共通テストに実用的な文章（報告書・資料等）を扱う大問が導入されたことを受け、椋山女学園大学でも、日程によっては図表や複数の資料を読み解く「情報処理能力」を問う問題が出題されている。短時間で要旨を把握する速読力と実社会に即した論理的思考力を身につけるとともに、新傾向に対応した予想問題集などで形式に慣れておくとうよい。

【古文】

●基礎知識の確認を進めよう

古文では、単語の意味や文法などの基礎知識が頻出である。また、文学史の出題比率も高く、暗記を中心とした対策を重点的に行おう。解釈問題でも、まずは単語や文法の知識を用いて選択肢を絞っていくことが大切である。

単語（古語）については、「意味が複数ある語」や「現在とは違う意味で用いられていた語」を中心に300語程度は習得しておこう。そのうえで、例文の中でふさわしい訳語を選ぶ練習も積んでおこう。

文法は、用言（動詞・形容詞・形容動詞）の活用をベースに、助動詞（活用・意味・接続・訳し方）、助詞（意味・訳し方）、敬語（種類と敬意の向き）について身につけておきたい。また、「なむ（なん）」「に」「る・れ」「なり」など、頻出の識別問題には問題集などを通じて慣れておこう。

●主語は補いながら読むようにしよう

前述の基礎知識を身につけながら、問題集・過去問題などで「読む」訓練も行おう。見たことがある文章（知っている場面）が出題されることは極めてまれで、多くの場合、試験場ではじめて読む文章に対応しなければいけないため、あらかじめ練習しておくことが重要である。また、古文では物語であれ日記・随筆であれ、主語を省略して書かれた作品が多いため、登場人物を整理しつつ、「誰が…」と補いながら読み進めることを日頃から意識しておこう。

●初見の文章を積極的に読もう

はじめて読むような文章でも、設問に関わる箇所を、単語や文法の知識を活用して読み進め、解答をしていくという方針で臨もう。問題集などを活用して多くの文章に触れよう。また、解釈の問題・内容理解の問題に対応するためにも、「どのようなきっかけで心情に変化が生じたのか」「心情の変化がどういった行動の変化につながったのか」といった関連性を意識しながら読む練習をしておこう。